

新しい授業づくりの文化を創る

第14号

令和5年3月10日「能力ベースの授業づくり実践講座」閉講式

令和4年4月25日に開講した「能力ベースの授業づくり実践講座」は、教材研と授業研をセットにして、小学校3セット、中学校2セットの計5セットを実践し、令和5年3月10日に閉講式を迎えました。

閉講式では、令和6年度の当初に100%の教職員が能力ベースの授業を目指せるように、令和5年度の本講座のあり方について、約50名の参加者が8つのグループに分かれて活発な意見を出し合い、齊藤先生からは4つの‘創る’をテーマにご講演いただきました。来年度以降の未来につながる活気に満ちた閉講式となりました。

受講者が描いた 令和5年度の講座

1年間講座で学んできた1期生が来年度の講座について話し合い、そのアイデアをホワイトボードいっぱいに描きました。

受講者が能力ベースの授業を各校で広げるために必要なことや吹田市全体への発信方法、講座に参加しやすくするための工夫等について、たくさんの意見が出されました。

能力ベースの理解を深める！

- ・能力ベースがめざす授業を明確にするガイダンス等が必要
- ・学習指導要領の読みを深める。
- ・各教科の見方・考え方を学び、本質的な学びに迫る。
- ・単元全ての取組が見たい。
- ・模擬授業があると、授業者も受講者もイメージしやすい。
- ・1期生がさらに学び、2期生をフォローできるようにする。
- ・受講者で研修グループ/自主研修

各校で広げる！

- ・能力ベースの共通の認識が必要（講座の後に共有の時間を）
- ・齊藤先生の実演を全教員で見る。
- ・校内で能力ベースの授業を見て、内容ベースとの違いを解説
- ・校内に発信するための講座を設ける。
- ・解説付き普及活動用動画が必要
- ・学校や中学校ブロックの研修テーマを能力ベースに。
⇒教育センターのサポート→教職員で自走できるように(持続可能に)。

市全体への発信！

- ・GIGA-HUB、E²Cナビ等の活用
- ・講座をライブ&オンデマンド配信
- ・動画配信には解説や授業を見る時の視点が必要
- ・教育研究報告会で、能力ベースによる「学校の変容」を伝える。
- ・市全体で指導案を共有
- ・初任研や5年次研等の法定研修や学力向上担当者会等に能力ベースを取り入れる。
- ・能力ベース新聞を活用。

参加しやすい工夫！

- ・講座に出張する時の学校体制の確保が難しい。
⇒参加またはオンデマンドの併用
- ・1セットからの参加を可能に。



未来の講座を自分たちで描く

～ 令和6年度のスタートにあたり、100%の教職員が能力ベースを目指せるために ～

齊藤先生の講義

受講者が描いた令和5年度の講座の内容を受けて、齊藤先生から本講座の目的である「新しい授業づくりの文化を創る」ために必要な4つの‘創る’について講義していただきました。



吹田市で授業づくりの文化を持続可能なものにしていくためには、教員自身が講座を創る立場に立って、自らの成長のために自動詞的に、学ぶ内容や学ぶ方法等の自分たちの学びの場を創ること、そして、学びのアップデートと持続性を確保するための組織の必要性等について言及されました。

1 教員が講座を‘創る’

○講座の価値を教員が創る

⇒受け身で講座に参加するのではなく、参加した教員が自動詞的に関わり、講座をより有意義なものに高め磨いていく。

○教員が講座で成長を実感する

⇒教科や校種の違いを越えて、講座での学びが自分の成長につながるよう、自らの変容のロードマップを描き、自分を尺度にして参加の仕方を考える。
例: 小学校の国語の授業を見て、中学校の理科の教員が自分の学びにつなげていく。(自動詞的な学び)

2 能力ベースの学びを‘創る’

○能力育成に向けて、能力を始発点(ベース)として学びを描く

「能力ベースの授業」= 子供の有能さを引き出し、能力を育成する学び
【令和4年度】で何ができるようになったか？

⇒学習指導要領の柱書の主旨(能力、見方・考え方、活動)から単元を創ること。

【令和5年度*】に何をできるようにしたいのか？ ※現行学習指導要領の折り返し地点

⇒子供のエビデンス(成長した姿)を踏まえた授業の分析

例: 個に焦点を当てて子供の変容を見取り、子供の姿から授業や指導案を分析する。

令和5年度を描く
4つの‘創る’

3 良質な教員の学び場を‘創る’

○「内容」: 学習指導要領を徹底して読み、その結果を指導案に

⇒吹田らしくこだわりをもって読む!(参加メンバーが納得する解釈・議論を)

内容の研究を深める!(知的な刺激を楽しむ)
例: 教科書の比較読み
チームで指導案を作り合って比較

○「方法」: 令和4年度は【総論的】→ 令和5年度は【各論的】に

⇒検討する内容を限定して学びを発展させる。
例: 単元の作り方のみを検討する回を設ける。

学び方のバリエーションに幅を持たせ、学びを磨くチャレンジ方法を多様にする!(配信方法も工夫し参加者増加を)

4 授業づくりの文化を‘創る’

○教員同士の語り合いが、授業づくりの文化を創る

⇒文化を創るには、新しい‘風’(能力ベースの授業づくり)を吹かせ続ける組織が必要

【アップデートを支える組織】

例: 講座推進メンバー: 講座をデザイン
授業推進ブロック: 授業研究を企画・運営

【持続可能な講座を支える組織】

例: 既存や新しい研究会等の組織とのタイアップ

【受講者の声】

- ・「自分で講座を創る」「自らの成長のロードマップを創る」この2つの言葉が教師の能力ベースだと感じました。学習指導要領をよく読み、これからの自分の授業アップデートをめざしていきたいです(K先生)。
- ・今日は、講座を創るテーマでとてもおもしろかったです。この学びは自分の学校での校内研究を創るうえでも参考になりました(Y先生)。
- ・今年度、校種・教科を超えたみなさんとの関わりを持てたことが、何より学びを深めるきっかけとなりました(K先生)。

【教育センター草場所長からの閉講の挨拶】

講座全体を通じて、自ら学びをとりに来られている参加者のみなさんへのリスペクトと感謝の思いでいっぱいです。公募制による学習指導要領に基づく能力ベースの授業づくり実践講座によって、今年度、吹田市に授業づくりの風は確かに吹きました。この風が風土となって授業づくりの文化ができれば素晴らしいと思います。‘Update for the Future’ 未来は輝いています。これからも吹田市の教育をみなさんとともに創っていきましょう。



新しい授業づくりの文化を創る

学び続ける教師の軌跡

14